

# 電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 電源地域のサクセスストーリー

平成16～17年度 (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例  
開発遅れのマイナスをプラスに大転換

## 「ほんもの」の地域資源で勝負する日本一大きな村

奈良県 十津川村



# 電気のふるさと

電源地域ニュース

C O N T E N T S



奈良県 十津川村「谷瀬の吊り橋」

## ● Key Person..... 2

佐賀県 玄海町 町長  
岸本 英雄

## ● 特集 電源地域のサクセスストーリー..... 4

平成16～17年度 (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業活用事例  
開発遅れのマイナスをプラスに大転換  
「ほんもの」の地域資源で勝負する日本一大きな村  
奈良県 十津川村

## ● いきいき 電源地域..... 10

地域振興に取り組んでいる電源地域の元気な姿を紹介します

福井県 池田町  
新潟県 上越市吉川区  
福島県 広野町

## ● センター掲示板..... 12

- 「エネルギープラザ2006 in 玄海町」を開催しました ..... 12
- あなたの地域の担い手づくり最近の研修事業から ..... 13
- 「エネルギー見学会&交流セミナー」を玄海町で実施しました ..... 13
- 電気のふるさと 産品自慢..... 14
  - 伝統の技 会津桐製品と編み組細工 福島県 三島町
  - 和菓子でないよ いな饅頭 愛知県 蟹江町
- 読者の声 ..... 15
- 人事往来 ..... 15
- 読者プレゼント ..... 15

### 電源地域探訪 ～表紙のことば～

“こころ のんびり”という言葉がぴったりの玄海町。「浜野浦の棚田」やリアス式海岸に代表される美しい風景、そして地域に住む人々の温かい心が私たちを癒してくれます。そして豊かな海産物、新鮮な農産物、「佐賀牛」といった畜産物はまさに絶品で、食した誰もが幸せな気持ちになります。

平成18年9月、玄海町は町制施行50周年を迎えました。「電気のふるさと」として、日本のエネルギー政策を支えている玄海町は今後、押し寄せる少子高齢化時代に焦点を合わせ、活力ある町づくりを進めていきます。

表紙：玄海原子力発電所(九州電力) 総出力：347.8万kW

営業運転開始：昭和50年10月(1号機)、昭和56年3月(2号機)、平成6年3月(3号機)、平成9年7月(4号機)

## Key Person



佐賀県 玄海町 町長  
岸本 英雄

玄海原子力発電所二号機が運転を開始して、昨年の十月で三十年を経過しました。昭和四十年代の本町は、農業・漁業の一次産業を基幹産業としていましたが、佐賀県のチベットのいわれるほど、水に恵まれず、季節風も強く、道路も狭く、農業を営むには大変厳しい条件のところでした。

昭和四十年始め、佐賀県から原子力発電所の誘致の話があり、先人達が、国のエネルギー政策と地域の振興、町の発展を願って、翌、四十二年六月に議会が原子力発電所の誘致議決をし、九州で初めて、原子力発電所運転に向け動き出し、玄海町の新たなエネルギー史が始まった訳です。

それから、約五年後の昭和四十六年三月、一号機の建設工事が着手されました。昭和五十年十月に営業運転を開始し、翌年の昭和五十一年六月には二号機の建設が着手される等、現在は、四基の原子力発電所が運転されています。発電設備三百四十七万八千キロワットの設備を有し、平成十五年度には、累計発電電力量が二百五十九億八千万キロワットに達し、九州の発電電力量の約三十%を占めるまでになっています。

その過程では、昭和五十七年、三、四号機増設の際には、「玄海町郷土の自然を守る会」が、町長の解職を求め、署名運動が展開されましたが、不成立に終わりました。振り返ってみますと誘致から現在まで、原子力に関すること出来事とともに歩んで参りました。

また、今回、図らずも玄海原子力発電所三号機で、核燃料サイクルの一環であるプルサーマル計画を実施することを決めましたが、エネルギー資源に乏しい我が国が、平和で豊かな国民生活を営むために、食糧とともにエネルギーの確保は欠かすことの出来ない大きな問題であり、原子力発電は国民経済・生活、地球温暖化問題に大きく貢献していると考えます。

平成十七年十月十一日、原子力委員会において決定され、十四日に閣議決定されました「原子力政策大綱」においても基本的な考え方として、エネルギー供給のバスターミックスを追求していくなかで、原子力発電がエネルギー安定供給及び地球温暖化対策に引き続き有意に貢献していくことを期待するためには、二〇三〇年以後も総発電電力量の三十～四十%という現在の水準程度か、それ以上の供給割合を原子力発電が担うことを目指すことが適切であるとされています。

私達の町玄海町は、原子力利用の「安全を大前提」に、九州さらには日本のエネルギー政策を支える町としての自負と文化生活の維持を保つ大きな役割を担っていると考えております。

更に、玄海町や周辺市町とともに、原子力発電所に係る振興策としては、昭和五十年から電源三法交付金が交付され、道路整備、福祉施設、教育・文化施設のほか、農道の整備、漁業の大型冷凍冷蔵庫等の産業振興の施設整備も進めながら、地域住民の福祉、所得の向上にも寄与してきました。

また、先にも述べましたとおり、玄海町は、農業を営むには大変厳しい条件のところでしたが、国営土地改良事業、県営畑地帯総合事業に取り組みと共に、昭和四十年代の米作中心の農業から、集約された農業、施設園芸(ハウスみかん、いちじく)、畜産(黒毛和牛)、タマネギ、葉タバコ等の生産と農業経営も変化してきました。

その様な状況の中で、発電所があることにより、税収増も見込まれましたので、農業の生産規模の拡大と後継者の育成を図ることを目的に、県の補助事業に嵩上げをしながら、農業の基盤整備を図ってきたところであります。一方、漁業については獲る漁業から、養殖漁業に変わり、一時は、県内でも有数の鯛の生産基地となりました。

たが、魚価の低迷、海外からの輸入増大等、現在では大変厳しい状況にあります。漁業の振興支援は喫緊の課題と認識しております。

商工業についても、地場企業の育成や商業集積によるまちの活性化を早急に図らねばならないと考えています。

さて、資源に乏しい我が国にとって電源地域は、そして、原子力発電所の立地に住む私達は、国のエネルギー政策と地球温暖化に貢献していることについて、大きく胸を張って良いと思います。

日本の石油の殆どは政治的に不安定な中近東に依存をしています。一九七〇年代の二度のオイルショック、あのような事が何時起こってもおかしくない世界の政情にあります。

本町の財政もエネルギー資源と同様に、原子力発電所があることによつての財源、税収等が何時までも潤沢ではありません。地方分権が実行段階に入り、市町村が地域における自主的かつ、総合的に広く担うこととされていますが、今後、三位一体の改革により、一層の歳入財源不足が懸念されます。

その様な中で、平成十五年十月、電源三法交付金制度がより使い勝手の良いものに改正されました。本町も交付金の使途について、ハード、ソフトの割合を決め、今後は、出来るだけソフトの占める割合を高くするように努めて行きたいと思っております。

また、住民の方々にもその時々々の状況を説明し、理解していただきながら、まちづくりに参画していただき、住民と共に知恵と汗を出しながら、「協働と共創」のまち、原子力発電所と「共存・共栄」するまちづくりを進めていきたいと思っております。

皆様も機会がありましたら、是非、私達のまち玄海町へお出かけいただきますようお願い致します。

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道



# 平成十六・十七年度(財)電源地域振興センターマーケティング調査事業活用事例 開発遅れのマイナスをプラスに大転換 「ほんもの」の地域資源で 勝負する日本一大きな村

歴史に名を記す  
豊かな自然に恵まれた村

十津川村は、奈良県の最南端・紀伊半島のほぼ中央に位置する山間の村です。人口は約四千五百人、総面積約六百七十二平方キロメートルで奈良県全体の約五分の一を占め、村としては日本一の広さを持っています。しかし村の約九十六パーセントが山林。森林と水資源には恵まれています。一方で地域の開発は遅れており、交通手段も国道二六八号線などカーブの多い山道を利用するしかないのが現状です。村の中心地まで大阪から車で約三時間半かか

り、バス便も少ないなどアクセスが良いとは言えません。地域には、関西電力株式会社の高圧水式発電所(全地下式)である奥吉野水力発電所(百二十万六千ワット)があり、奈良県全域に電力を供給しています。

十津川村の歴史はとても古く、伝説によると村の人々は、神武天皇御東征の際に道案内をした八咫鳥の子孫と言われています。壬申の乱(六七二年)、源平の争乱の元となった保元の乱(一一五六年など)といった史上に十津川の名前が登場し、村内には史跡が数多く存在します。さらに十津川村には、高さ五十四メートル長さ二百九十七メートル

と日本でも有数の長さ誇る「谷瀬の吊り橋」や日本の滝百選に選ばれた「笹の滝」など数々の名所と、湯量豊富な三つの温泉(湯泉地温泉、十津川温泉、上湯温泉)を擁する十津川温泉郷があり、昔から観光地として知られてきました。

十津川は十年持たない…  
村の存続の危機

かつて十津川村では森林資源を利用した林業が盛んで、全盛期には約百五十社あった企業が、二十五年ほど前から急激に減少して現在ではわずか二社になっています。温泉地を中心とする観光が村の産業



十津川村旅館組合  
組長 田花 敏郎さん

学部教授の松田忠徳さんを招きました。松田先生は日本初の「温泉学」の講座を持つ大学教授であるとともに、温泉についての数々の著書がある旅行作家。いわば温泉のカリスマ的存在でした。この松田先生との出会いが、十津川村の大きなターニングポイントとなったのです。

温泉学者・松田先生との  
運命的な出会い

旅館や温泉施設に従事する人たちのために開かれた「おもてなしの心の研修」の際、松田先生がたまたま宿泊したのが第三セクターによって経営されている十津川温泉の「ホテル昇」でした。十津川温泉郷のほとんどの温泉施設では、源泉の湯量が豊富なため、お湯を循環ろ過させずにそのまま流す「源泉かけ流し」式を採用していました。いわば十津川ではそれがあたりまえだったのです。ところが当時「ホテル昇」では、わざわざお金をかけて循環ろ過式を採用していましたが、機械設備によって衛生管理、温度を一定に保て、それが最高の温泉だと信じて

全国に先駆け村をあげての「源泉かけ流し宣言」

この「宝物」を生かすべく、村では松田先生の協力を仰いで、源泉かけ流しをテーマに温

Pick Up

## 奈良県 十津川村

奈良県十津川村は、緑の山々と清らかな溪流に代表される美しい自然に恵まれ、古代の伝説にも名を残す古い歴史を持つ地。また三つの温泉を抱える十津川温泉郷も全国的に有名です。しかし主力産業だった林業が衰退し、主要な産業となった観光業も不振の一途をたどり、人口も減少して村の存続の危機を迎えていました。そこで村では生き残りをかけ、「本物」をキーワードに「源泉かけ流しの温泉」と「世界遺産に選ばれた古道」を中心とした数々のプロジェクトを展開しています。今回は、外部の人の知恵やチャンスを活かしながら、地域の活性化に取り組んでいる事例として、官民が一体となって「心身再生の郷」づくりを推進している十津川村をご紹介します。

を支えてきたものの、近年では景気低迷などの影響で次第に観光客が減り、若者の村離れや少子高齢化で村の人口も減少の一途を辿っています。「現在、村の平均年齢は五十一歳。最も人口の多い世代は七十代となっています。日本の平均寿命が八十一歳であることを考えれば、あと十年もたないうちに村の人口は急減してしまいます。人口減少に歯止めがかからず、生産性も低い地域は、近隣の市町村との合併を余儀なくされているのが日本の現状。何もしなければ十年どころか、五年、三年も経たないうちに十津川村

はなくなってしまうかもしれません」と語るのは十津川村の村長更谷慈禧さん。平成十三年に村長となつてから常に危機感を持ち、どのような対策を打つべきか検討を重ねてきたといいます。

十津川村には、これまでに二度の大きな存続の危機がありました。一度目は明治維新の動乱で、二度目は明治二十二年の大水害です。「今や都市部への人口流出や林業の低迷などで、村は三度目の危機を迎えていると言えます。二度の危機で多くの尊い命や財産を失いましたが、村民の大変な努力によって危機をチャンス

源泉率、加熱・殺菌処理の有無、湯の入れ替え状況など六項目を浴槽近くに表示し、本物の温泉」をアピールしました。「湯量は多いのですが、湯温が五十六度から八十五度と高いのがこの源泉の特徴。水を加えれば温度は下がるものの、源泉百パーセントかけ流しにならないので、うちの旅館(田花館)では地下水の中に温泉のパイプを通してお湯を適温にしています。他の旅館や民宿でもいろいろ工夫しています」と、こだわりを語る田花さん。この宣言の効果は素晴らしく、温泉の宿泊客数が一ヶ月で前

## Success Story

奈良県 十津川村 「ほんもの」の地域資源で勝負する日本一大きな村



十津川村  
村長 更谷 慈禧さん

十津川村が誇れるものは、やはり美しく豊かな自然と歴史、そして温泉です。村では様々な補助金などを活用しながら、観光を切り口とした産業振興に取り組みしましたが、村内だけでの発想・企画力にはどうしても限界があり、危機を打開する明確な解決案は見出せませんでした。そこで村外の知恵を借りることが必要と考え、積極的に専門家を招聘する活動が始まったのです。その一環として平成十四年に「おもてなしの心の研修」の講師に札幌国際大学・観光

だっただけです。ところが当時「ホテル昇」では、わざわざお金をかけて循環ろ過式を採用していましたが、機械設備によって衛生管理、温度を一定に保て、それが最高の温泉だと信じて

この「宝物」を生かすべく、村では松田先生の協力を仰いで、源泉かけ流しをテーマに温



十津川温泉の「庵の湯」は、奈良県第一号の飲泉場と足湯、男女の内湯を備えた「源泉かけ流し」の公衆浴場。

源泉かけ流し温泉郷



十津川鼓動の会 阪口 弘子さん

年比の四十六分はも増えました。ところが、村民の中からは非難の声も聞こえました。「村の行政は、温泉地ばかりを優遇していると言っています。でもまずは村に人が来てくれることが大事なこと。そこから波及して活性化が始まるのに、理解してくれないのですね。」しかし、そんな批判も吹き飛ばす朗報が、すぐに飛び込んできました。

「源泉かけ流し」宣言をした翌月の平成十六年七月七日、十津川村にビッグニュースがもたらされました。「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されたのです。この世界遺産は奈良・和歌山・三重の三県にまたがるものですが、村内を通る古道の大峯奥駈道と熊野参詣道小辺路が含まれています。以前から山歩きの客が訪れてはいましたが、世界遺産として全国から注目を集めました。そして「源泉かけ流し」宣言と併せての効果が、観光客はさらに増加したのです。

### サミットに併せて「十津川鼓動の会」が世界遺産ウォークを実施

## 歩

第一回「源泉かけ流し温泉サミット」に併せて、村のサポートで村民が中心となって企画した様々なイベントが実施されました。「十津川鼓動の会」が主催した「世界遺産」語り部とゆめ果無ウォークもそのひとつ。これは熊野参詣道小辺路を、「ホテル昇」から果無集落まで往復約四キロ、一時間半をかけて語り部と呼ばれるガイドの案内を聞きながら歩く体験イベントです。

「十津川鼓動の会」は、村が開いた「語り部養成講座」の受講生たちにより、平成十四年に発足したグループ。世界遺産に登録された大分県に比べて、観光客はさらに増加したのです。



十津川村役場 観光課 課長補佐 増谷 良一さん

ところが、順風満帆と思えていた矢先、大雨が村を襲いました。「喜びもつかの間、記録的な大雨が崖崩れの被害をもたらしました。村への国道が閉鎖されてたちまち観光客が減りました。でもこれをひとつの警告と受け止め、ただ注目されるだけでなく、次に付けていく活動をしなくてはならないと気持ちを改めました」と十津川村役場・観光課課長補佐の増谷良一さんは話します。更谷村長をはじめ村役場では、「源泉かけ流し」と「世界遺産」という二つの宝物を村のパワーとして生かすために、さらに村外からの知恵が必要だと感じました。そこで村の出身者であるコンサルティングの専門家と人材育成の専門家を招聘し、村民によるワークショップ「創生塾」や役職員を対象とした研修会を行いました。

## 村の〴〵あたりまえが実は宝物 本物の感動体験「心身再生の郷」で村おこし

平成十六年度には(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業を活用しました。その調査結果を整理し、村がめざす将来像として「心と体を癒す安らぎの郷」づくりが提案されました。このマーケティング調査は平成十七年度も継続され、温泉のさらなるアピールとして「源泉かけ流し温泉サミット」の開催を決定。「心身再生の郷」というスローガンのもと、来訪者に本物の温泉、世界遺産、自然、おいしい食べ物などで健康や癒しを実感してもらおう具体的なプランも数多く生まれました。これは更谷村長が中心になり、役場職員や観光関係者、村民が意見を出し合って村の将来について真剣に考えた成果といえます。

## 湯

第一回「源泉かけ流し温泉サミット」を十津川村で開催 平成十七年十月二日、十津川村に「源泉かけ流し」を宣言した三つの温泉地(北海道

かと思われました。サミット時のツアーは、鼓動の会が企画した初めてのツアーでした。それまでは旅行会社の依頼で時間やルートが限られていたのですが、今は村の観光課のサポートで、自分たちの企画を提供できるのでやりがいがあります」と阪口さん。十津川鼓動の会では毎月一回、語り部の勉強会を行っています。また熊野参詣道小辺路は、お隣の奈良県野田川村・和歌山県田辺市本宮町にまたがっているため、これからは近隣市町村とも連携を進めていきたいと話してくれました。

## 食

村の主婦たちによる「ほんまもんグループ」も大活躍 このサミットでは、当日の昼食に販売された郷土料理弁当「ほんまもん弁当」が大評判となりました。サトイモや椎茸など村でとれた食材をふんだんに使った弁当を作ったのは、村



ほんまもんグループ 平瀬 生代さん

の主婦たちが中心となって活動している「ほんまもんグループ」です。ほんまもんとは本物、つまりごまかしのない純粋なもののこと。無農薬で栽培した村の野菜や自然のままの食材を使い、村ならではの食品を作って販売しています。同グループは、若い人とお年寄りが一緒に活動する福祉のワーキンググループとして平成十五年に結成されました。「サミットの際は、会員七人で百食分のお弁当を作り、みなさんに喜んでもらえたのが大きな自信になりましたね」と話すのは、「ほんまもんグループ」の平瀬生代さん。それから順調に活動は膨らみ、現在は十三人の会員がいます。「冬場を除く毎週土曜日、五月の連休、お盆に、『道の駅・十津川郷』の前に店を開いています。朝の六時、五十八歳から八十一歳までの主婦六人が集まり、ご飯を炊いたり餅をついたりしてその日に売る食品を作るんです。これを店頭で販売してくれるのが二十代半ばのお母さん方です。鯉節や高菜の茎などが入ったご飯を高菜漬で包んだ地元伝統料理『めはりず

## 世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、「修験道の吉野・大峯」「神仏習合の熊野三山」「密教の高野山」というそれぞれ起源や内容の異なる三つの山岳霊場と、それらを結ぶ「参詣道」によって形成され、千年以上にわたる日本人の精神と文化の発展・交流に重要な役割を果たしてきました。この大自然と文化の共同作品である文化的景観が、世界遺産として認められたのです。



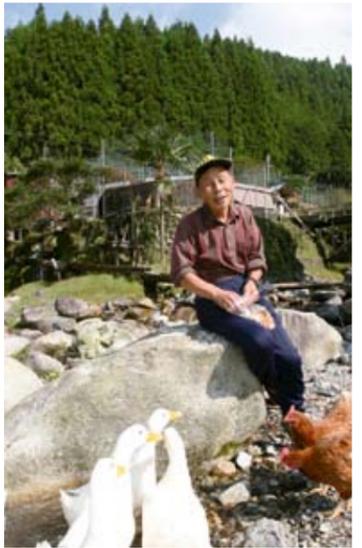
十津川村・果無集落に立つ熊野参詣道小辺路の石碑

## (財)電源地域振興センター マーケティング調査事業の内容 平成十六年度

十津川村の観光の実態や地域資源の実情を把握し、訪れる観光客や都市住民が村に何を求め、どう評価しているのかをアンケート調査。村内の宿泊施設の受け入れ態勢の「自己点検アンケート」を実施し、また、世界遺産に登録された屋久島地域の事例に学び、古道の世界遺産登録が十津川村に及ぼすインパクトの可能性を整理した。これらのデータをふまえて村民参加の検討会を開催し、村民・行政・観光関係団体が今後のあり方について意見交換を行った。さらに、観光ビジョンとして、温泉療養を軸とした村の将来像「心と体を癒す安らぎの郷」を提案した。

### 平成十七年度

平成十六年度の調査実績を受けて、温泉療法、世界遺産を歩く健康歩行や森林浴などの運動療法、食事療法、観光療法など、村の自然環境を効果的に活かして組み合わせた「心身再生の郷づくり」に向けての具体的な展開案を提案。村民の参画意欲を高めて「心身再生の郷」実現のため、基本方針として「5つのしくみ」(1)人材の育成(2)村の「宝物」の発掘(3)情報の発信(4)村外の応援団づくり(5)継続・改善のしくみづくり)とアクションプランを掲げ、これを支援した。また、「源泉かけ流し温泉サミット」を企画し、「心身再生の郷 十津川村」を村外にアピールした。



### 村の再生を支える「名脇役」たち

大野・せせらぎの里で観光客に、あめの魚(あまご)や四季折々の料理を提供している前倉さん(写真上)は、竹細工やわらざうり作りなど田舎体験の指南役サービスで大人気です。都会ではなかなかできない体験と前倉さんの温かいもてなしを求めて訪れるリピーターも多いとか。また、熊野参詣小辺路沿いにある果無集落では、岩本さんの家の前にある水飲み場(写真下)が、ウォーカーのオアシスです。湧き水を受ける大きな木の桶は、道行く人のためにご主人が松の木をくり抜いて作ったもの。写真のおばあさんはご主人のお母様で、村の観光ポスターに何度も登場しているちょっとした有名人です。十津川村には、「宝物」と呼べる名脇役がたくさん住んでいます。



「村には専業農家が少なく、お年寄りが自分たちで食べるために作っています。今までは余分にとれた作物は人にあげていました」と話す「ほんまもんグループ」の辻きさよさんは、平成十八年六月まで村役場の職員でした。辻さんはグループと役場の橋渡しをしながら活動を続けています。

### 地元の食品づくりでお年寄りの生きがいづくり

「ほんまもんグループ」の食品に使われる野菜は、すべて村の畑でとれたもの。それも多くは高齢者が作っています。農薬を使わずにヨトウムシなどの害虫はピンセットで取り、牛ふんや鶏ふん・油かすなどの有機肥料を使って丹念に栽培しているのです。



ほんまもんグループ 辻きさよさん

「でも今では、新鮮な野菜が好評で販売量も増え、お年寄りがやりがいを感じています。自分の作った野菜をみんなが喜んで食べて下さるので、畑を広げて野菜づくりをしています。人も増えているんですよ」と熱く語ってくれました。「ほんまもんグループ」の活動は、村のお年寄りの生きがいづくりにも役立っているのです。平瀬さんも辻さんも、ほんまもんの名前に負けないように頑張っています。

### 「心身再生体験イベント」に手ごたえ

「心身再生体験イベント」に手ごたえ。サミット後も十津川村では、各種の世界遺産ウォーク、温泉・古道・健康食を組み合わせた「心身再生」体験バスツアーなど、様々なイベントを推進してきました。中でもユニークなのは、平成十八年九月に開催した「なびきツアー」です。これは世界遺産ウォークを中心に、山小屋での宿泊や自然のグルメ体験などができる二泊三日のツアーイベント。受け身のツアーではなく、生涯の思い出となる能動的な体験が盛り込まれています。なびきとは人生の重要な通過点という意味。語り部の先導で古道を歩きながら、参加者が自分自身を見つめ直すことを目的としています。「大峯奥駈道」には、アスファルト舗装されて古道が四百メートル

### 感

消えた箇所があります。その道に平行して山道を切り開く「道普請」をツアーの中で行っただのです。草に覆われていた山肌、黒々とした土の道に生まれ変わる、参加者から歓声が沸き起こりました。参加料金は六万八千円から高いのです。

### いいものがあるだけではダメ ブランド化に向けた情報発信

テレビ番組「ガイアの夜明け」で十津川村の再生プロジェクトを放映

一方で十津川村では、マスコミに対する働きかけも開始しました。狙いをビジネス分野に波及効果の高い番組に絞り、テレビ東京の「ガイアの夜明け」に取材依頼を行いました。政府の助成金に頼るだけでなく、世界遺産の道を活用して村のブランドづくりに取り組

む姿は価値があるとして、平成十八年一月から半年以上にわたって村の活動が取材されました。「世界遺産として登録されている道は、「紀伊山地の霊場と参詣道」とスペインの「サントニアゴ・デ・コンポステーラ」の二つだけ。この道はフランスからスペインのサンティアゴ大聖堂へ続くキリスト教三大巡礼路のひとつで、毎年世

界中から驚くべき数の人々が、ただ歩くだけのために集まっています。スペインでは沿線の市町村が一体となつて道を守り、育てることで、道の恩恵を受けているのです」と語るのは更谷村長。この道を持つ本当の価値を知るために、村長は自費でスペインへ出かけ、実際に道を歩きました。そしてその様子は「ガイアの夜明け」でも取り上げられました。

リチュアルウォークがブームで、精神を高めるために歩くという行為が見直されています。十津川村は、日本人にその機会を提供できる素晴らしい宝物を持っているのです」と更谷村長。「ガイアの夜明け」では「なびきツアー」も紹介され、「心身再生の郷」づくりへの取り組みが全国放送されました。九月五日の放送時には、村役場のホームページに一時間にわたりアクセスが殺到し、翌日には番組を見て感動した人々から多くの電話がかかってくるなど、全国に向けて大きなアピールになりました。

### 官民一体となつて村のブランド化をめざす

「ガイアの夜明け」放送後すぐに、今度はNHKから十津

川村を含めた熊野地域の「世界遺産の道」を取材したいという依頼を受けました。日本在住のイギリス出身作家であるC.W.ニコルさんが村の世界遺産を歩くという企画で、世界に向けて十津川村や熊野地域の素晴らしさをPRする番組制作が始まりました。これは英語で世界に報道される番組となります。「村ではスペイン大使館にも足を運び、十津川村と同程度の規模の世界遺産沿いの市町村を紹介していただきました。このように日本国内だけでなく、世界も視野に入れた村のブランドづくりを始めています。これからは様々な面で、しっかりと村の体制を整えていくことが重要です」と更谷村長の熱意は衰えを見せません。スベ

インの世界遺産の道では「シャコベオ」という古道産業振興協会が、ブランドづくりに重要な役割を果たしています。十津川村でも、このような産業振興協会や民間団体・勉強会・役員職員らと交えたボランティアアベースでの研究会を立ち上げたことを考えています。さらに、世界中からツアー客を呼ぶ計画やそれを案内する「語り部百人計画」、農作業体験や取れた野菜の送付サービスでツアー参加者と農家をつなぐ「心の家族百人計画」、おみやげ・付加価値グッズの販売など、ブランドは膨らんでいます。

「十津川村が提供できるほんもの」は、訪れる人たちに本物の感動を与えることができます。この感動体験こそ「TOTSUKAWAブランド」で、多くのの方が千年残る事業に参加でき感動したと喜んでいました」と観光課の増谷さん。手ごたえを感じています。官民が力を合わせた「心身再生の郷・十津川」づくりへの取り組みは、だんだん具体的な形となつて現れてきました。

### 「心身再生の郷」づくり 関連年表

- 平成13年 更谷慈禧氏、十津川村・村長に就任。
- 平成14年 村の「語り部養成講座」の受講生たちにより、「十津川鼓動の会」発足。
- 平成14年 十津川村が「おもてなしの心」の研修に札幌国際大学の松田忠徳先生を招聘。
- 平成15年 若者とお年寄りが一緒に活動する「ほんまもんグループ」発足。
- 平成16年 十津川温泉郷が全国に「源泉かけ流し」を宣言。
- 平成16年 「紀伊山地の霊場と参詣道」が、ユネスコの世界遺産に登録される。
- 平成17年 村内すべての温泉施設で浴槽の湯のデータを公表する「温泉情報の自主開示」を実施
- 平成17年 第1回「源泉かけ流し温泉サミット」を十津川村で開催。
- 平成17年 「世界遺産 語り部とゆく果無ウォーク」で十津川鼓動の会の語り部が活躍。ほんまもんグループが作った「ほんまもん弁当」が大好評。
- 平成18年 第2回「源泉かけ流し温泉サミット」を北海道弟子屈町の川湯温泉で開催。
- 平成18年 「なびきツアー」開催。テレビ東京「ガイアの夜明け」で十津川村の再生プロジェクトが放映。



お問い合わせ先  
十津川村役場 観光課  
TEL 0746-62-0001  
http://www.vill.totsukawa.lg.jp

「電気のふるさと」電源地域ニュース」では、電源地域のさまざまな取り組みを紹介しています。このコーナーでは、読者の皆様から寄せいただいたご意見・ご要望を積極的に誌面に反映させて参りますので、皆様の地域で取り組んでおられる事業や施策をぜひご寄せください。巻末にご返信いたします。心よりお待ちしております。

新潟

第9回「越後よしかわ酒まつり」を盛大に開催！  
～地域の酒米、杜氏の伝統文化で地域資源の再認識と情報発信～  
新潟県 上越市吉川区

新潟県上越市は海や山の自然に恵まれ、昔から農耕文化が発展してきた地域です。吉川区は、新潟県最大の酒米産地であり、江戸時代末期から造り酒屋が多く出現し、繁栄してきました。豪雪地が冬季の出稼ぎを助長し、県内でも最大の越後杜氏を輩出する町です。

「越後よしかわ酒まつり」は、このような杜氏の文化を伝承しようと11年前、「酒シンポジウム」を2年続けて開催したことに端を発します。酒文化の継承について熱心な議論が重ねられ、平成10年に第1回の酒まつりを開催しました。以来、毎年10月初旬に盛大なお祭りが行われています。



会場ステージでは酒造りの工程と苦労を唄った「酒造り唄」が披露された

10月1日、今年も初秋の爽やかな天候のもと、会場となった「道の駅 よしかわ杜氏の郷」には各地から多くの方が訪れ、酒文化に係る多彩なイベントが開催されました。中でも愛飲家にはたまらない、全国の銘柄200種類を試飲できる「全国銘酒さき酒会」は、大盛況となりました。

吉川区は自然の宝庫です。酒造りは丸ごとよしかわ地域産にこだわり、米は地元産山田錦、水はブナ林の湧き水、杜氏は地元小池杜氏と、三拍子揃っており、品質を第一に生産しています。

「よしかわ杜氏の郷」は、地域の歴史を伝える情報発信基地、農畜産物の販売基地として親しまれています。来年の10回開催を目指して「酒の町・よしかわ」を今後も大いにPRしていきます。

(電源地域産業育成支援補助金活用事業)

お問い合わせ先  
越後・よしかわ杜氏の郷  
TEL 025 - 548 - 2331

福島

第13回「ひろの童謡まつり」音楽祭を開催  
～新たな童謡を地方から発信～  
福島県 広野町

福島県広野町は、海・山・川の美しい自然に恵まれ、その風景は「とんぼのめがね」「汽車」といった童謡・唱歌の舞台として人々に親しまれてきました。

童謡祭、童謡コンクールといったイベントは、毎年各種開催されていますが、そのほとんどは首都圏に集中しており、地方で開催されるものは数少ないというのが現状です。「もっと地方が主体となり発信する童謡祭があってもいいのではないか」という考えから、広野町では平成6年から「童謡まつり」を開催してきました。平成14年まで全国から童謡詩を「課題の部」と「自由の部」として募集し、それぞれの優秀作品には社団法人童謡協会の作曲家の先生により曲を付けていただき、これまで「ひろの」から新しい童謡19曲を生み出すことができました。



ひろの発の新しい童謡やお馴染みの童謡を会場全員で歌う

また、平成10年からは歌唱コンクールをあわせて行い「ひろの童謡まつり」音楽祭として実施。今年は10月16日に開催されました。当日は、課題詩の優秀作品9曲を含め、28曲の童謡を広野童謡大使の眞理ヨシコさんや地元広野町出身の吉田夏子さんなど、童謡歌手の皆さんと郡内の小・中学生、コーラスグループが披露し、来場者も一体となった心とむコンサートとなりました。

(電源地域産業育成支援補助金活用事業)

お問い合わせ先  
広野町公民館  
TEL 0240 - 27 - 3244

福井

「農村力」あふれる元気な町へようこそ！  
～人と社会の「あたりまえ」を残そう～  
福井県 池田町

福井県池田町は、九頭竜川水系 足羽川の水源地域に位置し、人口約3,500人の町です。町土の91.7%が山林であり、盆地地形のなかで農林業を基盤とした生活が営まれています。また、高齢化率は36.9%と県内第一位となっています。

いわゆる条件不利地域にありますが、「顔の見える大きさ」が団結力につながり、住民は元気で、行政と一体となったまちづくりを進めています。

特に、町独自の有機農産物推進運動「ゆうき・げんき正直農業」、生ゴミ回収NPO法人「環境Uフレンド」による「食ターナー事業」と「土魂壤」の開発、少量多品目生産で育てられた各種の農産物を9坪で年間1億円を売り上げた町のアンテナショップ「こっぽい屋」などが知られており、こうした取り組みが高く評価され、平成18年1月には自治体環境グランプリで環境大臣賞を受賞しました。

視察に訪れた方から「成功している一番の要因は何ですか」と聞かれますが、私たちは、「『あたりまえ』が土台にある暮らし」と答えています。すなわち、  
・隣同士で「助け合う」相互扶助の心  
・「資源として生かす」もったいない精神、手間をかけて「物をつくる」匠の技  
・自分の地域は自分で育てる意欲などがあげられます。

こうした農村の魅力(=農村力)は、「人と社会を治療する力」とも言え、これからの社会づくりや人づくり、観光・ホスピタリティ、教育・福祉にも応用していけると考えています。

「お金の額」「規模の大小」を追い求めるのではなく、「農村力」を生かす取り組みを進めると同時に、これを社会全体に広げることが、「あたりまえ」を取り戻し、いじめ問題や社会の格差等を解決していくことにつながるでしょう。

池田町は、これからも地域の人とモノ(資源)、コト(文化)を生かしながら、農

村力を発揮して、日本農村力デザイン大学や百匠一品プロジェクトなど、ますます元気な地域を目指したまちづくりを進めていきます。是非一度、農村力あふれる池田町へお越しください！

池田町の環境事業の詳細はこちら  
<http://ecoikedajp/> (池田町ホームページ)

日本農村力デザイン大学

平成17年度から開講している「日本農村力デザイン大学」は、正規の大学ではありませんが、学生が「農村の価値=農村力」を学び、これを生かすデザイン力を身につけることを目指す学びの場です。現在、群馬県から福井県まで幅広い地域の学生が参加しています。

百匠一品プロジェクト

農村力デザインの考え方は、まちづくりだけでなく地域の振興にも生かされています。主力商品の米については、「生命に優しい米づくり運動」として全量を特別栽培米とすることを目指して取り組み、生産された米は「百匠一品」として販売しています。「百匠一品」とは、「地域の粋と匠」を届けるブランドであり、お金の価値向上だけでなく、食べ物を育てる人の心を伝え、食べる人とつくる人の安全・安心、田に住む生き物の保全など、社会的・文化的価値を向上させるプロジェクトです。



福井市内にあるアンテナショップ「こっぽい屋」で販売される池田町産の「百匠一品」の新米

お問い合わせ先  
池田町 振興開発課  
TEL 0778 - 44 - 8004

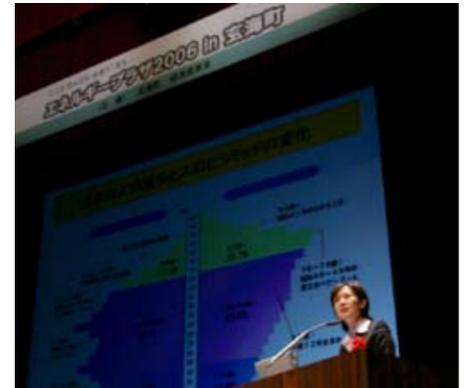
いきいき電源地域

地域振興に取り組んでいる  
電源地域の元気な姿を紹介します

# 「エネルギープラザ2006 in 玄海町」を開催しました

お問い合わせ先  
【財】電源地域振興センター 普及啓発課  
電話：03・5405・8128  
e-mail：fukyu@dengen.or.jp

平成十八年十月三十一日(火)から十一月二日(木)までの三日間、佐賀県玄海町において「エネルギープラザ2006 in 玄海町(主催：玄海町、経済産業省 後援：佐賀県、唐津市 実施主体：(財)電源地域振興センター)」を開催しました。今回のエネルギープラザのテーマは、「地域力―自立と協働」と設定。同テーマに重点をおいたプログラムを展開しました。



講演する白石氏

初日の開会式・講演会は約四五〇名の参加者が集まるなか、はじめに主催者を代表して岸本英雄玄海町長と高木美智代経済産業大臣政務官が、続いて後援者を代表して川上義幸佐賀県副知事と坂井俊之唐津市長があいさつを行いました。



岸本玄海町長 高木経済産業大臣政務官

その後、東洋大学経済学部教授の白石真澄氏が「少子高齢化時代に求められるまちづくり」と題して講演。白

石氏は、「将来、高齢化は進んでもその八割はまだ元気。決して社会的弱者ではない。そういった方の能力をいかに活用していくかが大切」とした上で、これからの都市と農山漁村の交流の意義や効果を説明しました。さらに、情報化と高齢化をうまく融合させて農業を活性化させている愛媛県内子町の事例をはじめ、全国の個性ある地域の取り組み事例を紹介した後、「その地域の人間だけを考えるのではなく、外部の目を取り入れて市場をしっかりと見極めてほしい。そして、効果的な方法で情報発信し、新しく来る人のために受け入れ体制を構築してほしい」と訴えました。



地域ブランド開発 販路拡大分科会

別課題を抽出した上で今後の地域振興へ向けての方策を打ち出しました。

各会場では、全国的先進的な取り組み事例



産学官連携検討分科会

や講師からの事前質問を基に、その手法やノウハウについて活発な意見交換が行われました。

三日目は、実地研

## あなたの地域の担い手づくり 最近の研修事業から

今回は平成十八年九月七日(木)・八日(金)にかけて当センターで行われました研修No.16「中心市街地活性化対策を考える」の中から、初日の研修模様をご紹介します。

中心市街地の活性化に資する手法をさまざまな切り口から学ぶ本研修では、まず、東北ジャイロ流通研究所所長 小柳剛昭氏が「あなたのまちでもできる中心市街地活性化―視点を変えれば針路が見える―」と題して講演。小柳氏は「購買の基本は価格以上の大きな満足を得ることができるとして、これができれば消費者は『リーダー』となり、さらには『口コミ』によって宣伝してくれます。そうなるには消費者のホンネをとらえること、消費者を主役にする『演出(物語)』を考えることが必要となります。例えば『鮮魚の特売日は、地域のもえるゴミの日の前日にする』といった『売った後』に至るまで物語を考える発想が必要なのです」。

さらに、「消費者のニーズ(日常生活に必要だから)に対応するだけではなく、ウォンツ(そういう商品ならぜひほしい)に対応する店づくり・ウォン

【財】電源地域振興センターでは、電源地域の長期的・自立的な振興を担う人材の育成を目的に研修事業を行っています。今年度は国内外合わせて二十八件の様々なテーマを設定、先進地事例の紹介などを交えながら、実務的な研修を実施しています。

ツを提案できる商店街づくりを目指すことが求められます。『店逸品運動―静岡県静岡市の呉服町名店街』や『北斎と栗のまち―長野県小布施町』は、消費者の満足度が高い事例として有名です」と述べ、「小さな欠陥の修正や小さな満足の積み重ねがいずれ大きな成果に繋がっていく」と受講者にエールを送り、締めくくりました。

講演後は、参加者がグループに分かれ、「まちなか再点検―あら探し、宝探しで中心市街地を点検し、評価してみよう―」「まちなか活性化バーチャル体験―アイデアを出し合って活性化を仮想体験―そしてにぎわいが生まれる快感を自分のまちで実践しよう―」と題して、自分たちの町を見直し、消費者のホンネやニーズをとらえるワークショップを実施しました。当日は、全国の電源市町村から四十名九名の参加があり、講演・ワークショップ後の情報交流会など、大変美り多くの研修となりました。

お問い合わせ先  
【財】電源地域振興センター 人材育成課  
電話：03・5405・8114  
e-mail：jinzai@dengen.or.jp

## 「エネルギー見学会&交流セミナー」を玄海町で実施しました

当センターは、九州経済産業局による公募事業を受託し、平成十八年十月十五日(日)、佐賀県玄海町で「エネルギー見学会&交流セミナー」を実施しました。電気の生産地である玄海町と大規模な消費地である福岡市・長崎市の小学五・六年生とその保護者五十七組百十名が参加し、エネルギーや環境問題について学んでいただきました。

まずは九州電力(株)玄海エネルギーパークを見学し、エネルギーや原子力について学んだ後、地元地域おこしに積極的に取り組んでいる「玄起海」の協力を得て、佐賀牛や鯛など地元の食材を使ってバーベキューランチを行い、参加



玄海エネルギーパークで原子力発電について学習



バーベキューでは佐賀牛や鯛の育て方を学び、味わう

者はその味に舌鼓を打っていました。また、玄海町をテーマとしたクイズ大会なども大変盛況でした。その後はサイエンスショーで科学の不思議を体験したほか、手回し発電機を制作し、鉄道模型を走らせてタイムを競うなど、多彩な内容のプログラムに子ども達は目を輝かせていました。当センターでは今後も、見学会や交流会などを企画・運営することを通じて、地域振興のお手伝いをして参ります。

お問い合わせ先  
【財】電源地域振興センター 調査企画課  
電話：03・5405・8112  
e-mail：chousakikaku@dengen.or.jp

人事往来

●電源立地都道府県知事(平成18年8月～10月選挙分)

県名	氏名	当選月日
長野	村井 仁	8月6日
香川	真鍋 武紀	8月27日

●電源地域市町村首長(平成18年8月～10月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日
泰阜村(長野)	松島 貞治	8月1日
高山市(岐阜)	土野 守	8月20日
聖籠町(新潟)	渡邊 廣吉	8月22日
平泉町(岩手)	高橋 一男	8月22日
入善町(富山)	米澤 政明	8月22日
新庄村(岡山)	笹野 寛	8月27日
長柄町(千葉)	成嶋 尚武	8月27日
球磨村(熊本)	柳詰 恒雄	8月29日
新地町(福島)	加藤 憲郎	8月29日
飯山市(長野)	石田 正人	9月3日
川棚町(長崎)	竹村 一義	9月5日
高砂市(兵庫)	岡 恒雄	9月10日
波佐見町(長崎)	一瀬 政太	9月10日
最上町(山形)	高橋 重美	9月10日
七ヶ宿町(宮城)	梅津 輝雄	9月24日
日高町(和歌山)	中 善夫	9月26日
深川市(北海道)	河野 順吉	10月1日
金山町(福島)	長谷川 律夫	10月1日
御浜町(三重)	古川 弘典	10月1日
木祖村(長野)	栗屋 徳也	10月3日
日之影町(宮崎)	津隈 一成	10月17日
君津市(千葉)	鈴木 洋邦	10月22日
可見市(岐阜)	山田 豊	10月22日
田布施町(山口)	長信 正治	10月22日
栗石町(岩手)	中屋敷 十	10月22日

●「伊佐の焼酎豚」はとても美味しそうでした。どこにもない美味しいものを作ろうという思いと様々な人の苦勞には頭が下がります。私の町豊岡市出石町は皿そばをはじめ、そばを使った饅頭やかきんどう、ソフトクリーム等がとっても美味しいです。  
(兵庫県豊岡市 女性)

●「二村一文化」で粘り強く「写真の町」づくりを推進している東川町を紹介したVol.4の「電源地域のサクスストーリー」では、女性ならではの粘り強さ、誠意に感銘を受けました。  
(鹿児島県薩摩川内市 女性)

●「いきいき電源地域」を読み、全国には自分の知らない個性的なイベントがあるのだと分かりました。私の町では「YOSAKOIさせぼ」で街を活性化しようという商店街が団結して頑張っています。  
(長崎県佐世保市 女性)

●私の町は漫画「土佐の一本釣り」で知られた鰹の町です。平成十八年一月一日、太平洋に面した旧中土佐町と四万十川が流れる旧大野見村が合併し、新中土佐町となりました。小さな町ですが、このような自然資源を生かした新しいまちづくりに取り組んでいます。  
(高知県中土佐町 男性)

「プナツめんとエリンギのセット」に関するお問い合わせ先  
十津川村役場 観光課  
奈良県吉野郡十津川村大字小原 三五一  
TEL:074616210001



●市町村合併が多くなる地域で行われましたが、合併しなくても輝いている自治体、そしてそのような自治体との連携を取り上げてください。  
(奈良県野迫川村 男性)

【編集後記】  
本号で取り上げました奈良県十津川村の特集記事の中で、「大雨による崖崩れの被害をひとつの警告と受け止め、ただ(源泉かけ流し温泉郷や世界遺産として)注目されるだけでなく、次につなげていく活動をしなくてはいけない」という十津川村役場・観光課課長補佐である増谷さんの言葉がありました。  
また、名脇役としてご登場いただいた岩本さんご家族にとりましても、家や畑とともに生活の一部である大切な道が、世界遺産に登録されたことにより、日常生活にいろいろの変化が表れたことと察します。しかし、これをよい変化と捉え、「十津川村を訪れて古道を歩いた人々が、『来て良かった』と思う感動体験を少しでも持ち帰ってほしい」と湧き水の提供を自ら進んで行いました。  
お二人の発想は「変化をプラスに変える」というものでした。生き残りかけた危機感と、行政と住民の前向きな姿勢が、村再生の大きな原動力になっているのではないのでしょうか。  
「ほんもの」へのこだわりをしっかりと持ち、社会が求めるものへ向けて、楽しみながら取り組んでいる皆さんの表情は明るい笑顔で、まさに「笑う門には福来る」なのだと思わずにはいられます。編集室では今後も元気で明るいまちづくりを目指す人々に焦点を当て、よりよい誌面づくりに励んでまいります。  
(S)

電気のふるさと 産品自慢  
伝統の技 会津桐製品と編み組細工

福島県 三島町



会津桐ダンス

三島町は、福島県の西部、只見川流域に位置する人口2,200人の小さな町で、全域に山林が広がり、古くから「会津桐」の産地として知られています。

「会津桐」は燃えにくく、湿気に強い性質があるため、大切な衣類などを守るタンスの素材に使われることで有名です。また、非常に軽くやわらかい木材であることから、

タンスだけでなく、ベビー用品や玩具の材料として注目されているほか、スピーカーや楽器の材料としても研究され、商品化されています。

冬期、三島町の地域性を一言で言えば「豪雪」。深い雪に覆われる中、冬の手仕事として継承されてきたのが、日常生活に用いる

お問い合わせはこちら → 三島町役場 産業建設課 産業係  
TEL: 0241-48-5533

カゴやザルなどの「編み組細工」で、野山から採取されるヒロロ(和名:ミヤマカンズゲ・オクノカンスゲ)、山ブドウ蔓の皮やマタタビ蔓などの植物を素材にして作られています。その技術は縄文晩期(2500年前)までさかのぼることができ、同町の荒屋敷遺跡からは縄や各種編組等の約1万点の籠類が出土しています。現在では、現代の生活に使えるように工夫された手提げバッグや小物などの製品が製作されており、堅牢で素朴な手編みの良さが特徴です。



平成15年には「奥会津編み組細工」として国の伝統的工芸品に指定されました。

電気のふるさと 産品自慢  
和菓子でないよ いな饅頭

愛知県 蟹江町



いな饅頭

蟹江町は、愛知県の西南部に位置し、濃尾平野の南部沿岸の低湿地で町域全体が0m地帯となっており、町内には蟹江川・日光川・福田川など大小の河川が流れ町域に占める河川面積が総面積の4分の1を占める地域特性をもっています。

ご紹介する「いな饅頭」とは、「饅頭」という名から和菓子を連想しますが、これは「いな(ぼらの幼魚)」の外観を傷つけないように

でじっくり煮込んだ特製の赤味噌にシイタケ、ギンナン、ユズなどの具を入れた「あん」を「いな」の腹に詰めることから、名づけられたものです。さらに、これを「あん」がこぼれないように腹を破らずに焼き、仕上げます。蟹江町に伝わる独特の料理方法です。

「いな饅頭」が食べられる時期は、ちょうど蟹江祭が行われる9月の終わりから3月までで、特にボラのおいしい時期である10月から1月頃が食べごろです。

ぜひ一度、名古屋から電車で約10分の所にある蟹江町にお寄り下され、蟹江でしか食すことのできない名物郷土料理をご賞味ください。

※町内では下記の3店舗で食事ができますが、いずれも事前予約が必要です。

- ・いなまん Tel: 0567-95-2715
- ・丸河 Tel: 0567-95-1001
- ・湯元館 Tel: 0567-95-3454

お問い合わせはこちら → 蟹江町観光協会事務局 TEL: 0567-95-1111



本紙の取材にご協力いただきました十津川村の方々、ありがとうございました。

---

## 財団法人 電源地域振興センター

---

〒105-0013 東京都港区浜松町一丁目18番16号 住友浜松町ビル6階  
TEL 03-5405-8111 (代表) URL <http://www.dengen.or.jp/>

(本冊子は再生紙を使用しています)

読者の皆様からのご意見・ご感想を反映したいと思います  
アンケートにご協力をお願いします